

非行的態度の抑制要因に関する研究Ⅱ¹⁾

松井 洋*・中村 真**
堀内 勝夫***・石井 隆之****

Restrained Factors of Attitude toward Delinquency II

Hiroshi MATSUI, Shin NAKAMURA, Katsuo HORIUCHI, Takayuki ISHII

要 約

日本の若者の非行的な態度を抑制する要因を明らかにすることを目的に、非行許容性、価値観、恥意識、親子関係について、中学、高校、大学生合計2006名を対象に調査を行った。そして、ここから中高大×男女均一の対象者をサンプルとした。調査内容は、非行許容性、恥意識、親子関係、また、価値観について、他者志向、享楽志向、努力志向、将来志向である。このようなことを行う目的は松井他(2006)の結果を、対象者をととのえることで検証するということである。

因子分析の結果、恥意識は自分恥、他人恥、仲間恥の3因子、非行に対する許容性は不良行為許容性と犯罪許容性の2因子となった。価値観は他者志向、努力志向、享楽志向、将来志向の4因子となった。親子関係は父母ともに親密さと、しつけの2因子となった。

非行許容性は不良行為許容性と犯罪許容性の2因子構造となったので、この2因子を従属変数とし、上記の他の因子を説明変数とする重回帰分析を行った。

結果は、不良行為許容性については、まず他人恥、次いで父親からのしつけの影響が大きく、享楽志向、将来志向、仲間恥が低いと不良行為が大きいう結果であった。

犯罪許容性についても、非行許容性と同様に重回帰分析を行った。その結果、最も影響の大きい変数は他人恥であり、次いで、自分恥の2つの尺度が有意となった。

これは、松井他(2006)の結果と概ね矛盾しない結果であったと言える。

他方、本論文の「父親のしつけ」が不良行為に対して有意な影響を持っているという結果は、父親の影響の低さが問題とあることの多いわが国では、注目すべきことであると考えられる。

キーワード：非行的態度、抑制要因、恥意識、親子関係

*教授 社会心理学

**准教授 社会心理学

***産業能率大学

****日本・精神技術研究所

問題

著者らは、日本の青少年の非行の問題について、特に非行を抑止する要因を中心に、約20年間研究してきた。抑止する要因としては、道德意識、愛他性、共感性、価値観を取り上げてきた。そして、最近では恥意識を抑止する要因として取り上げている（堀内他2004, 2005, 2008, 松井1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 松井他1995, 1998, 2004, 2005, 2006, 2008 永房他2004, 中村他2004, 2008, 中里他1992, 1993, 1996, 1997, 1999, 2003, 2007）。

松井他（2006）では、日本とトルコの中高生を対象にした2004年の調査を基に恥意識と非行許容性を中心に分析を行っている。恥意識について、従来、適応を妨げる否定的要因というとらえ方が多かった。しかし、われわれは、恥意識が問題行動を抑止する要因として機能するのではないかと期待しているのである。

そこで、非行許容性を従属変数とした重回帰分析を行なった。結果は、日本の生徒では非行許容性は他律的恥意識によって説明され、他律的恥意識つまり他者を意識した恥が強いほど非行を許容しないと考えられ、次に、道德意識が強いほど非行を許容しないと関係である。しかし、トルコの中高生の非行許容性は道德意識によって説明され、恥の意識とは関係が無いということが言える。つまり、日本では恥意識が非行許容性を抑止する機能があると言えるのである。ただし、恥意識であっても、仲間と同調するような、他者同調的恥意識では抑止機能は期待できないのである。つまり、どのようなことに恥を感じるのかという、恥意識の質の問題である。

以上のように、わが国では非行許容性という非行につながる態度に対して、恥意識が抑止力を持つと言えるだろう。しかし、調査によると日本の若年層では、抑止力を持つと考えられる種類の恥意識はむしろ弱いのである。このことがわが国の若者の諸問題の原因となっていると言えるだろう。

ところで、松井他（2006）では2004年の調査データを基に分析を行った。しかし、その後、恥意識に関する項目を追加、手直した。それは、主に「仲間恥」と考えられる項目の追加であった。そのため、日本の若者の非行的態度を説明する要因が違ったものになる可能性がある。そこで、日本の中学生、高校生、大学生の非行的態度を規定する要因について、改めて分析することとした。

なお、外国との比較は別の機会に行う。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、表1のとおり、都内および近郊の中学、高校大学生2006名（男子1074名、女子932名）。ここからサンプル数の検討を行った。結果は高校生男子の人数が最も多く、最も少ない大学生男子の約3.5倍とかなりの偏りが見られた。この研究は日本の若者の典型的な姿について検討したい。そこで、中学生男子から大学生女子までの6つのセル毎に150ケースずつランダムに抽出し、計900ケースのデータを分析に用いた。

表1 調査対象者

		中学校	高校	大学	合計
男子	人数	295	607	172	1074
	性別の%	27.5%	56.5%	16.0%	100.0%
女子	人数	287	299	346	932
	性別の%	30.8%	32.1%	37.1%	100.0%
合計	人数	582	906	518	2006
	%	29.0%	45.2%	25.8%	100.0%

2. 実施時期

中高生については、2004年9月～12月、大学生については2006年4～6月に調査を実施した。

3. 調査項目

松井他（2005）、堀内他（2005）から非行許容性（非行的な行為をどの程度「悪い」と考えるか）について10項目、恥意識25項目、親子関係について、父母別に14項目ずつ計28項目、また、価値観について、他者志向・享楽志向、努力志向、将来志向の各々3項目の12項目。以上についてそれぞれ4件法で回答させた。項目については因子分析の結果を参照されたい。

結果

1. 恥意識の因子分析

恥意識の因子分析を行った。方法は、中高生を対象とした分析である堀内他（2005）と同様に、最尤法、プロマックス回転・3因子抽出による因子分析を行った（表2）。その結果、堀内

他(2005)とほぼ同様の構造が得られた。また、パターン行列を詳細に検討しても、単純構造にかなり近いものが得られた。また、各因子毎に内的整合性を確認するために α 信頼性係数を算出したところ、0.7以上の値を示した。

したがって、この結果を採用し、第1因子は「自分で決めたことを守れなかったとき」という項目に代表されるように、自分自身の基準に対する恥意識なので「自分恥」と名づけた。第2因子は「電車やバスの中」、「静かな病院で」など公的状況や「先生」などの大人に対する恥意識なので「他人恥」とした。第3因子は「みんなが」など、意識する対象が公的場面や大人ではなく、自分の周りにいる人を意識した恥なのでこれを「仲間恥」とした。そして、この3

表2. 恥意識の因子分析

	因子			共通性
	1	2	3	
自分で決めたことを守れなかったとき	0.756	- 0.138	- 0.021	0.458
友達との約束をやぶってしまったとき	0.681	0.023	0.019	0.475
友達におもわずウソをついてしまったとき	0.670	- 0.040	0.046	0.474
自分が正しいと思ったことができなかったとき	0.622	- 0.014	0.007	0.426
悪いことをしたのにだまされてそれをかくしているとき	0.619	0.126	0.011	0.528
友達に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	0.582	- 0.127	0.177	0.365
いじめられている友だちを助けられなかったとき	0.565	0.086	- 0.011	0.396
親との約束を破ってしかられたとき	0.552	0.179	- 0.027	0.500
努力が足りなくて目標が達成できなかったとき	0.538	0.015	0.014	0.361
試験勉強をしようと決めていたのに、なまけてしまったとき	0.528	0.122	0.024	0.392
電車やバスの中で携帯電話をかけて大きな声を出したとき	- 0.043	0.726	- 0.096	0.472
宿題を忘れて先生にしかられたとき	- 0.058	0.628	0.122	0.472
授業に遅れて先生にしかられたとき	- 0.131	0.614	0.248	0.473
静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき	0.022	0.563	0.013	0.403
かんでいたガムを道ばたにすてたとき	0.241	0.542	- 0.140	0.450
とめてはいけないところに自転車をとめたとき	0.141	0.537	- 0.132	0.359
電車やバスで2人分の席をひとりじめして座っているとき	0.288	0.476	- 0.137	0.440
家で自分だけ勝手なことをしてしかられたとき	0.269	0.365	- 0.031	0.389
友達に自分の失敗を笑われたとき	- 0.098	0.364	0.334	0.295
してはいけないことを親に見つかったとき	0.205	0.320	0.110	0.292
みんなが知っている話を自分だけ知らなかったとき	0.146	- 0.216	0.710	0.374
町で自分のファッションを変な目で見られたとき	- 0.022	0.168	0.579	0.388
自分だけが流行の物をもっていなかったとき	0.018	- 0.176	0.572	0.305
みんなができることを自分だけできなかったとき	0.092	0.161	0.493	0.350
自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき	- 0.070	0.344	0.402	0.362
固有値	7.482	2.437	1.645	
寄与率 (%)	29.930	9.749	6.581	
因子間相関 (第2因子)	0.618			
因子間相関 (第3因子)	0.168	0.328		
α 信頼性係数	0.868	0.832	0.719	

因子で尺度構成を行った。

2. 恥意識の属性間比較

これまでの研究で、非行的態度を説明する要因として恥意識の重要性が述べられているため、本論文でも確認のため、3因子の恥意識に関して中学生男子から大学生女子までの6つ属性間の比較を行うため、分散分析と多重比較を行った。

その結果3因子の恥意識全てについて属性間に有意な差があった。

また、図1のとおり、自分恥については、高校生女子と男女問わず大学生が高く、次いで中学生の男女、最も低いのが高校生男子という結果であった。

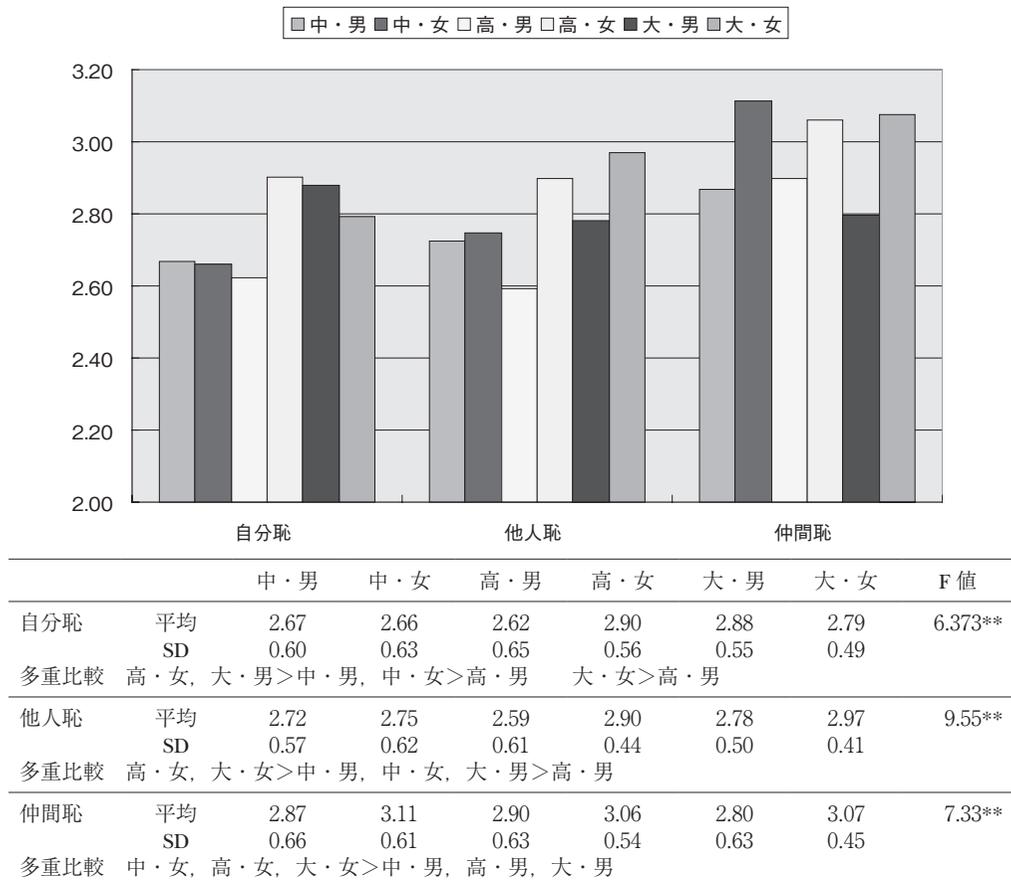


図1 恥意識の属性間比較

他人恥については、大学生または高校生の女子が最も高く、次いで大学生男子と中学生、最も低いのは高校生男子であった。

仲間恥については、大きく2つに分かれ、大高中にかかわらず、女子の方が高く、男子の方が低いという結果であった。

3. 非行許容性の因子分析

非行許容性の構造を把握するため、10項目を用いて因子分析（最尤法，プロマックス回転，2因子抽出）を行った。第1因子は、「エッチな雑誌やアダルトビデオを見る」などの6項目から構成され、一概には犯罪とは言えないが、社会的に逸脱した行動への許容性を示すと考えられることから、「不良行為の許容性」と命名した。第2因子は、「人の物を盗む」などの4項目から構成され、明らかな犯罪行為に対する許容性を示すと考えられることから、「犯罪許容性」と命名した。

表3 非行許容性の因子分析

	因子		共通性
	1	2	
q1_3 エッチな雑誌やアダルトビデオを見る	0.810	- 0.118	0.534
q1_2 酒を飲む	0.801	0.003	0.617
q1_10 異性の友達と二人で泊まる	0.779	- 0.062	0.541
q1_4 夜遅くまで外で遊ぶ	0.745	0.019	0.499
q1_1 タバコを吸う	0.620	0.167	0.530
q1_9 学校をサボる	0.561	0.142	0.384
q1_7 人の物を盗む	- 0.110	0.887	0.502
q1_5 ちょっとしたものを万引きする	0.057	0.763	0.496
q1_8 覚醒剤などの薬物を使う	0.025	0.530	0.259
q1_6 ケンカをして怪我をさせる	0.204	0.326	0.219
固有値	4.314	1.667	
寄与率 (%)	43.14	16.67	
因子間相関 (第2因子)		0.418	
α 信頼性係数	0.869	0.690	

4. 価値観の因子分析

複数の因子分析結果を比較検討し、最小二乗法，プロマックス回転，4因子抽出で比較的まとまりの良い結果を得た。第1因子は、

「08 人生は自分のことだけでなく人のことを考えることが大切だ」

非行的態度の抑制要因に関する研究Ⅱ

「02 皆が幸福にならなければ個人の幸福はない」

「04 人生はお金だけでは幸福になれない」

の3項目から構成され、他者のことを考える内容の項目に負荷量が高いことから「他者志向」と命名した。

第2因子は、

「07 今よりも将来のために努力する」

「10 成功はその人の努力しただけだ」

の2項目から構成され、努力することに関係する内容から「努力志向」と命名した。

第3因子は、

「09 何よりも自分の生活を充実させることが大切だ」

「05 今が楽しければよい」

「06 人生にはお金がなにより大切だ」

「03 人生は運に左右されることが多い」

「01 人になんと思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ」

の5項目から構成され、お金が大切で、自分の生活を充実させ、努力よりも運に志向が向いて

表4 価値観の因子分析

	因子				共通性
	1	2	3	4	
q4_4 人生はお金だけでは幸福になれない	.627	-.067	.095	-.014	.168
q4_8 人生は自分のことだけでなく人のことを考えることが大切	.435	.198	-.048	-.125	.173
q4_2 皆が幸福にならなければ個人の幸福はない	.401	.044	.035	-.036	.124
q4_7 今よりも将来のために努力する	-.030	.781	-.017	.008	.189
q4_10 成功はその人の努力しただけだ	.125	.271	.091	.084	.090
q4_9 何よりも自分の生活を充実させることが大切だ	-.046	.098	.506	.137	.160
q4_5 今が楽しければよい	.038	-.383	.437	.039	.161
q4_6 人生にはお金がなにより大切だ	-.387	.098	.414	-.182	.199
q4_3 人生は運に左右されることが多い	.173	-.048	.322	-.185	.062
q4_1 人になんと思われようと自分のなっとくできる人生が大切	.068	.073	.281	.258	.106
q4_12 進学や就職のことが不安だ	.177	.080	.121	-.509	.094
q4_11 自分の将来は明るいと思う	.128	.158	.134	.428	.126
固有値	1.873	1.579	1.305	1.254	
寄与率 (%)	15.610	13.156	10.875	10.451	
因子間相関 (第2因子)	.171				
因子間相関 (第3因子)	-.213	.077			
因子間相関 (第4因子)	.146	-.010	.066		

いることから「享楽志向」と命名した。

第4因子は、

「11 自分の将来は明るいと思う」

「12 進学や就職のことが不安だ」

の2項目から構成され、将来について肯定的な見方をしていることから「将来志向」と命名した。

因子間の関係は、「他者志向」他の3因子と弱い相関があった。「享楽志向」とは弱い負の相関であり、「努力志向」と「将来志向」とは弱い正の相関であった。「他者志向」以外の3因子間では、0.1以下の相関係数であり、ほぼ無相関と思われる

5. 親子関係の因子分析

子どもから見た親子関係の構造を明らかにするために、父（母）との関係に関する14項目を用いて因子分析を行った。複数の結果を比較検討し、最終的に最小二乗法、プロマックス回転、2因子抽出の結果が単純構造に近いと判断し、この結果を採用した。

第1因子は、「父（母）が好きだ」「父（母）とはうまくいっている」などの5項目から構成され、「親密さ」と命名した。

第2因子は、「父（母）から人に親切にすることの大切さを教わった」「父（母）から我慢することの大切さを教わった」の2項目から構成され、「しつけ」と命名した。

このように、親子関係は、父との関係でも、母との関係でも、同じ2因子の構造となった。そして、第1因子は「関係」についての因子であり、第2因子は親からの「働きかけ」に関する

表5 親子関係の因子分析（父-子）

	因子		共通性
	1	2	
q5_6 私は父が好きだ	.964	-.063	.689
q5_5 父とはうまくいっている	.804	-.091	.521
q5_10 私は父に愛されていると思う	.660	.044	.445
q5_7 父を尊敬している	.633	.234	.617
q5_9 父のようになりたい	.416	.333	.477
q5_12 父から「がまん」することの大切さを教わった	-.048	.818	.476
q5_11 父から人に親切にすることの大切さを教わった	.002	.817	.510
固有値	4.055	.964	
寄与率 (%)	57.928	13.770	
因子間相関 (第2因子)	.653		
α 信頼性係数	.868	.792	

非行的態度の抑制要因に関する研究Ⅱ

表6 親子関係の因子分析（母-子）

	因子		共通性
	1	2	
q6_6 私は母が好きだ	.990	-.104	.700
q6_5 母とはうまくいっている	.791	-.031	.561
q6_10 私は母に愛されていると思う	.732	.034	.530
q6_7 母を尊敬している	.591	.295	.658
q6_9 母のようになりたい	.458	.331	.536
q6_12 母から「がまん」することの大切さを教わった	-.076	.869	.524
q6_11 母から人に親切にすることの大切さを教わった	.045	.812	.580
固有値	4.350	.892	
寄与率 (%)	62.148	12.742	
因子間相関 (第2因子)	.681		
α 信頼性係数	.888	.832	

る因子であった。

6. 非行許容性を従属変数とした重回帰分析

不良行為許容性を従属変数とする重回帰分析をステップワイズ法により行った。3つの恥意識、4つの価値観、4つの親子関係で合計11の変数を投入した。その結果、表7のように最も影響の大きい変数は他人恥であり、次いで、享楽志向、父親からのしつけ、将来志向、仲間恥の順に、5つの変数が有意となった。回帰係数の正負でみると、他人恥と父親からのしつけが高く、享楽志向、将来志向、仲間恥が低いと非行許容性が高いという結果であった。

表7 不良行為許容性を従属変数とした重回帰分析

	R		R ² 乗		t	有意確率
	0.399	0.159				
	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ			
(定数)	3.31	0.27		12.40	0.00	
S02 他人恥	-0.45	0.05	-0.32	-8.80	0.00	
S4_3 享楽志向	0.24	0.06	0.13	4.02	0.00	
S5_2 父親からのしつけ	-0.09	0.03	-0.11	-3.44	0.00	
S4_4 将来志向	0.10	0.04	0.09	2.65	0.01	
S03 仲間恥	0.10	0.05	0.08	2.31	0.02	

従属変数: S1_1 不良行為許容性

犯罪許容性についても、非行許容性と同様に重回帰分析を行った。その結果、表8のように最も影響の大きい変数は他人恥であり、次いで、自分恥の2つの尺度が有意となった。

表8 犯罪許容性を従属変数とした重回帰分析

	R	R ² 乗			
	0.389	0.151			
	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
(定数)	2.851	0.104		27.415	0.000
S02 他人恥	- 0.325	0.044	- 0.306	- 7.307	0.000
S01 自分恥	- 0.115	0.042	- 0.115	- 2.750	0.006

従属変数: S1_2 犯罪許容性

考察

非行に対する態度を抑制する要因を明らかにすることを目的に、非行許容性、価値観、恥意識、そして、親子関係について調査を行った。これは、松井他（2006）の結果を、質問項目、対象者をととのえて検証するところみである。調査対象者は中学、高校、大学生合計 2006 名であるが、中学生男子から大学生女子までの 6 つのセル毎に 150 ケースずつランダムに抽出し、計 900 ケースのデータを分析に用いた。このような分析を行ったのは、日本の若者の非行や、それにかかわる要因を整理、確認するためである。

非行や非行を説明すると思われる要因の構造を確認するために、各要因別に因子分析を行った。

因子分析の結果、恥意識は自分恥、他人恥、仲間恥の 3 因子となった。この 3 因子構造は、松井他（2005, 2006, 2007）、中里・松井（2007）と一致するものである。先に問題において述べたように、本研究の調査では、これらの先行研究とは「仲間恥」項目を中心に質問項目の手直しをしている。そこで、分析をやり直したわけだが、やはり、大人や社会を意識する他人恥と、自分の身の回りにいる友人たちだけ意識する仲間恥とが独立した異なる意識であるということが確認された。また、3 因子の恥意識には属性間の違いがあった。

非行に対する許容性は不良行為許容性と許容性犯罪許容性の 2 因子となった。犯罪ではないが、望ましくない行為と、犯罪行為に対する態度の 2 因子構造であることと、その項目もこれまでの研究と一致している。すなわち、不良行為と犯罪行為に対する態度は、異なる態度であるということが安定して示されているわけである。

価値観は他者志向、努力志向、享楽志向、将来志向の 4 因子となった。これらの構造はこれまでの結果と矛盾はしないが、本論文で享楽志向と名づけた因子は、過去の研究では現在志向、物質志向と呼んでいたものを合わせた因子となった。つまり、今のことだけ考えるということ

と、心より物に関心が強いということは、ひとまとまりのこまった態度だと言える。

親子関係は父母ともに親密さと、しつけの2因子となった。この構造もこれまでの研究と矛盾するものではなく、一貫して親子の「関係」と親からの「働きかけ」に関する因子構造となる。

以上の因子分析の結果は、概ねこれまでのわれわれの研究と一致し、意図した構造をも支持するものであった。

これらの因子分析によって要因の構造を確定したので、この結果を基に、不良行為許容性と犯罪許容性の2因子を従属変数とし、上記の他の因子を説明変数とする重回帰分析を行った。

結果は、不良行為許容性については、まず他人恥、次いで父親からのしつけの影響が高く、反対に享楽志向、将来志向、仲間恥が低いと不良行為が高いという結果であった。

犯罪許容性についても、非行許容性と同様に重回帰分析を行った。その結果、最も影響の大きい変数は他人恥であり、次いで、自分恥の2つの尺度が有意となった。

松井他(2006)では、「他律的恥意識と他者を意識した罪悪感が非行意識に対して相対的に強く影響し、価値観と親との心理的距離は相対的に弱い影響」という結果を得ている。ここで言う他律的恥意識は、本論文の他人恥に近い因子であるので、概ね矛盾しない結果であったと言えよう。

他方、松井他(2006)では「親との心理的な距離や価値観は、非行に対する意識には直接影響する要因ではないとも考えられるため、重い非行と軽い非行に対する許容性を従属変数とした、共分散構造分析のパス解析モデルを適用した分析を行った。この結果、他律的恥意識の非行に対する罪意識への影響が確認できた。また、価値観については、「他者志向」が2つの恥意識に対する影響が認められた。そして、「他律的恥意識」に対しては、「母親に対する親近感」が最も影響があった。」という結果を得ている。無論、分析の方法が異なるので当然とも言えるのだが、この点については、本論文の結果と全く同じとは言えない。本論文の「父親のしつけ」が不良行為に対して有意な影響を持っているという結果は注目すべきことである。すなわち、これまでの研究では上述のように母親の影響のほうが効果が大きいと考えられてきたからである。父親の影響が低いことはわが国の特徴であり、問題点であった。この論文の分析で、非行的態度に対する父親の影響が確認されたことは、そのような意味で意義がある。この点についてはさらに分析する必要があると考えている。

注

- 1) 本研究の実施には、科学研究費補助金（平成18-20年度 基盤研究（C）、代表 松井洋、課題名「非行の抑制要因としての恥意識に関する研究」）の助成を受けた。

文献

- 堀内勝夫・中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之・鈴木公啓, 2005, 「恥意識の構造」, 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集.
- 堀内勝夫・中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究（1）—価値観との関係—」, 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, p.526.
- 堀内勝夫・松井 洋・中村 真・中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究（1）恥意識の構造」, 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, pp.354-355.
- 松井 洋, 1991, 「青年期における愛他行動の発達とその規定因」, 『川村学園女子大学研究紀要』第2巻, pp.181-193.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之, 1995, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『日本心理学会第59回大会発表論文集』, p.173.
- 松井 洋, 1997, 「愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第8巻, 第1号, pp.147-165.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 1998, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『社会心理学研究』, 第13巻, 2号, pp.133-142.
- 松井 洋, 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—」, *Health Sciences*, vol.14, no.2, pp.45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋, 1998, 「愛他性に関する国際比較研究Ⅱ—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第9巻, 第1号, pp.175-186.
- 松井 洋, 1999, 「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—」, 『川村学園女子大学研究紀要』第10巻, 第1号, pp.131-153.
- 松井 洋, 2000, 「日本の若者のどこがへんなのか—中学生・高校生の国際比較から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第11巻, 第1号, pp.101-114.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 2000, 「中学生の親子の心理的距離」, 『日本心理学会第64回大会論文集』, p.190.
- 松井 洋, 2001, 「日本の中学生の親子関係」, 『川村学園女子大学研究紀要』第12巻, 第1号, pp.101-114.
- 松井 洋, 2002, 「日本の中学生の親子関係と非行的態度」, 『川村学園女子大学研究紀要』第13巻, 第1号, pp.105-119.
- 松井 洋, 2003, 「親子関係と子どもの道徳性—日本, アメリカ, トルコの中高生の比較—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第14巻, 第1号, pp.85-99.

非行的態度の抑制要因に関する研究Ⅱ

- 松井 洋, 2004, 「社会的迷惑行為に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第15巻, 第1号, pp.55-68.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究(4) —社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感—」, 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, p.522.
- 松井 洋, 2004, 「少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性」, 児童心理, Vol.58, no.2, pp.16-21 金子書房.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之, 2005, 「非行的態度の抑制要因に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第16巻, 第1号, pp.27-44.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓, 2005, 「恥意識と道徳意識の関係」, 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, pp.101-102.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之, 2006, 「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども—, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第17巻, 第1号, pp.51-70.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫, 2007, 「恥意識に関する文化比較および世代間比較」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第18巻, 第1号, pp.123-140.
- 松井 洋, 2007, 「親と子の双方から見た親子関係」, 日本発達心理学会第8回大会発表論文集ラウンドテーブル.
- 松井 洋, 2008, 「現代若者の価値観」, 丸山久美子編「21世紀の心の処方学」第3部17. アートアンドブレイン.
- 松井 洋・六角絵里子・中村 真・堀内勝夫・中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究(3) 非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係」, 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, pp.358-359.
- 永房典之・中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究(2) —非行的態度との関係—」, 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, p.524.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究(3) —親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響—」, 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, p.520.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫, 2007, 「子どもの意識・態度の形成因としての親子関係に関する研究」, 日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, pp.84-85.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究(2) —親子関係と恥意識の形成」, 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, pp.356-357.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久, 1992, 「非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」, (財)日工組調査研究財団.
- Nakasato, Y. & Matsui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol.27, p.562.
- Nakasato, Y. & Matsui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths-. *International Journal of Psychology*, vol.28, p.48.
- 中里至正・松井 洋(編著), 1997, 『異質な日本の若者たち』, ブレーン出版.
- 中里至正・松井 洋, 1999, 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋, 2003, 『日本の親の弱点』, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋, 2007, 「「心のブレーキ」としての恥意識—問題ある日本の若者たち」(共編著) ブレーン出版.